

今日私は、以下のような概念に新しい光を当ててみたいと思っています。それは、アフリカのコミュニティアリズム、ウブントゥ、アフリカらしさ、アフリカ中心性、アフリカ中心主義、アフリカ性、アフリカ学などという概念です。このことは、必然的に人間はどうあるべきかという本質的な問題や、その場だけを切り取って理解するのではなく時間的な幅を持ったものごと全体をとらえて考えることの重要性、そして利他的な互酬性を考えることにもつながってきます。パンIIアフリカニズムやアフリカ・ルネッサンスなどの概念もそうですが、これらの概念は、異口同音に次のことを言

ヨは、アデバヨールの欲深い親族には批判的ではあるが、彼らを完全否定はせず、排除しようともしない。それは別に、仕送りなどが婉曲的でインフォーマルな開発援助だから、ではない。問題を共有し、アイロニーやユーモアで先送りしたり切り抜けたりする、生き生きとした人間像を支持し、相互行為の場を重視するのだ(コンヴィヴィアリティ)。

これは絵空事にみえるだろうか。個人の一生を単位として考える近代の限界を超えて、遠い射程でみてゆくと、大切なのは、異質なものが、共存する居場所があることなのである。異質なものの共存のネゴシエーションは、終わりのない企図である(講演では航海の語を使っている)。終わりのない物語のなかで、「いかに生きていくか」。そのことは、著者の鍵概念である不完全性(incompleteness)や会話(conversation)と結びつく。

おうとしています。それは、自分のアイデンティティを形成すること、何かに帰属することとは「矛盾するのではなく」、フレキシブルで、包括的なものであり、ともにダイナミックで複雑な、希望に満ちた過程なのだということです。

アイデンティティがまとまりをもったり、統合されたり、他のアイデンティティとの関係性を求めることには、ミクロとマクロのレベルでの重要性が考えられます。それは、抽象的であると同時に、ローカルかつグローバルな具体的なものでもあります。重要なのは、もともと異なったアイデンティティの持ち主が、自らが望む自由と尊厳を損なうことなく

日本語で読めるニヤムンジヨ

・「フロンティアとしてのアフリカ、異種結節装置としてのコンヴィヴィアリティ」楠和樹・松田素二訳(松田素二・平野(野元)美佐編『紛争をおさめる文化』京都大学学術出版会、二〇一六年)

・「開発というまぼろしが、ウィッチクラフトの噂を広げているのだ」梅屋潔訳『思想』一一二〇号。訳者解説も参照されたい。

私たちが近代の畏に気づいたとしても、「どうしたらいいか」と処方箋が欲しくなったら、近代に毒されている証拠である。手軽な、短絡的な処方箋などはどこにもない。少しでもよいかから、実際には手の届かない、ウブントゥをもつ、完全な理想の人間に近づこうとすること。その意味では、彼が説くのはアフリカに限定されない、普遍性をもったひとつの哲学である。

ウブントゥは、フリーウェアのOSとしても有名だが、他者への思いやりを指す人生の本質的な行動規範である。アフリカであれ、日本であれ、近代社会は、とかく目に見える不平等が先鋭化する時代である。少なくとも建前上はそれを補正しようとするはずの開発や福祉制度も、利権につながってしまう。私たちは、ともすると個人の「私有財産」の権利を強調し、防衛的になりがちだ。読者のなかにも、本稿に登場するアデバヨールに、歯がゆい思いをする向きもあろう。しかし、ニヤムンジヨ

距離をおく。それらの議論が依拠する「システム」や、GDPやGNI、経済成長率や失業率など、私たちが内面化してしまっているモデルを相対化し、時間をも相対化して、こうした問題を考えようとするのである。特に講演の最終部分は、爽快なまでに筋の通った近代批判となっている。

© Francis B. Nyamnjoh  
カメルーン・ヤウンデ大学大学院修了後、1990年にレスター大学で博士号取得。アフリカ社会科学研究発展評議会を経て、2009年よりケープタウン大学人文学部教授。英国アフリカ学会のフェージ・オリバー賞(2018)、エーコ文学賞(2014)をはじめ、様々な学術賞を受賞。現代アフリカを代表する思想家である。

## アフリカらしさとは何か

## ウブントゥという思想



撮影:トッド・クレイ

フランシス・B・ニヤムンジヨ

訳:梅屋 潔(神戸大学・ケイプタウン大学)

解説

梅屋 潔

以下に掲載するのは、二〇一九年五月二日、アフリカの日を記念して、南アフリカのフリーステイト大学で行われた講演である(なお、紙数の都合で、著者の了解を得て一部、割愛あるいは書き改めた部分がある)。

アフリカ、カメルーン旧英領のグラスフィールド出身の著者は、世界的な人類学者、劇作家、小説家、思想家である。その思想の特徴は、社会や文化、人生の複雑さを長期的なスパンにわたって、(その死や、見えない世界も含めて)全体的なものとして、浮き沈みも含めて受け入れようとするところにある。

ゆえに、構造調整その他のアフリカを取り巻く開発の現状を厳しく批判する一方で、経済的要素のみを取り出した分析にも

共生していける気持ちになるような幻想空間をつくりだすことなのであり、そのためには、個々のアイデンティティというものは、どちらかといえば意識されにくくなるのです。

異質なものを包み込む (Inclusivity) という包摂の考え方は、歌の歌詞から家庭用娯楽ビデオ、テレビやラジオのドラマ、小説にいたるまで、アフリカのポップカルチャーでよく扱われるテーマです。ここでは、成功はみんなでなしとげるものということが強調されます。個人の成功は、家族や友人、同じ村の仲間や同じ国の国民など、その人がどんな身の上でどういうネットワークを持っているかにもよるのですが、親しい人を (地理的に離れたところにいるとしても) 含めたかたちでないと、意味がないと考えられている、ということなのです。どこでも億万長者とか呼ばれる人々がいます。しかし、多くのアフリカのなかで共有され、流通している成功の論理のなかでは、蓄積したものを、ある意味で無限に他の人に再分配しつづけるのでなければ、真に成功したとみなされないので。

「ウブントゥ (Ubuntu)」というのとは、昔々二語の言葉でズル、コーサ、スワティそしてンデベレ語で広く用いられています。昨今では、アフリカじゅう、あるいは世界じゅうの他の集団でも用いられるようになってきています。コーサでは、「人々は、他の人々を通じてその人々となる」という意味です。口語的には、「私はあなたあってこそだ」とか「私たちはともにあるのだ」といったような意味になります。

「私」が人間であるからである。また「私」が人間であるのは、私が他の人間に支えられているからだ。そのことが「他人の屈辱や弱さをわがごとく感じる」ことにつながるのです。ツツにとつて、ウブントゥとは、「真の人間になるために欠かせないものであり、自分が人生のなかで他の人と結びついていることを知ること」でもあるのです。

二〇一三年の一月にヨハネスブルクのソウエト地区で行われたネルソン・マンデラを記念する式典で、当時のアメリカ大統領だったバラク・オバマは、マンデラを何百万もの人々のウブントゥの真実に目をひらかせた教師、ウブントゥを体現した人として称えました。「私たちは、みな目には見えないかたちでつながっています。人間としてひとつなので」とオバマは言います。私たちは他の人に信頼されるためには、まず他の人を信頼しなければなりません。「和解は、過去を忘れたり、なかったことにすることは違います。過去に、みんなで寛大さと真理をもって立ち向かうことなのです」(ホワイトハウス公式サイト、二〇一三年二月二〇日)。

#### ウブントゥイズムを実践すること

ウブントゥは、社会の組織原理でもあります。ウブントゥは、コミュニティのなかの個人がお互いのつながりを意識し、「互いの関心や、互いの満足がどういったものなのかを理解する」ことによって、人を社会化します。与え、受け取り、

しかし、一緒にいるという認識や感覚だけでは、ウブントゥの真の意味を満たすことはできません。すべての人と日々の暮らしに本当の意味で参加して、他者とともに、みんなで行う社会的行動をとっていることが必要なのです。ウブントゥは人生の哲学であり、お互いの思いやり、お互いがつながっていること、そして支えあうこと、そしてコミュニティに深くかかわっていることを重視します。このことが、「集団のアイデンティティに対する深い忠誠と、他者の権利を本当の意味で尊重すること」になるのです。ウブントゥは、「それぞれの個人の地位によるのではなく、純粹に他者との関係を通じて」個人を定義し、理解しようとするのです。

この哲学は、言い方は違ってもアフリカ大陸では広く共有されています。ここでは個人の権利とは、責任をみんなと共有して、全員の権利をお互いに大切にすることに発生する権利なのです。人間は相互に支えあっているのだ、とか、他人が頼りになるのだという考え方がその前提になっています。デズモンド・ツツ (一九三二-) は、南アフリカ真実和解委員会の中心にもウブントゥ精神が息づいているといいます。ウブントゥを持っていて人は、寛大で、親切で、気遣いや思いやりのある「人のこと」です。ウブントゥは、自らの持つものを他者とわかちあい、「ある人間性をかちえたことは、他の人が持つ人間性と密接に結びついている」という事実を積極的に認めようとしています。「ある人がその人であ

そしてお返しとして逆に与えることの意味を認識させるのです。それは、マルセル・モースの言い方でいえば、全員の安寧の妨げになり、結局個人にも不利益として跳ね返ってきてしまうような「自分のためだけの強欲な利益追求」への抑止力になるのです。

モノをどんどん回すことによって、ウブントゥの世界では富も絶えず動き続け、いろいろな人の手を経ます。富める場所も、貧困に苦しむ場所も変遷します。全員が、平等に機会と可能性を持つことになります。人は人生を通じて、太陽も、風雨も、落とし穴も、平等に享受することになるのです。

ウブントゥ精神は、相互接続と相互依存を大切にします。多くのものが少数の手に握られていたり、相互の義務を軽んじたりするようなことはあってはなりません。誰にも死は訪れますが、誕生から死まで、死よりも悪い運命から逃げられない人がいるような状況も、あってはならないことです。

では、こうした考え方で日常生活を送るとは、いったいどういうことでしょうか。人が他人によってその人たりうる、というのは、どういう意味でしょうか。「人間であることが他の人間を認識することによって確かなものになるとしても、さらにそのことを踏まえて、他者とのなかで人間性を確立する」(M・B・リモース) という挑戦を遂行するには、どうすればよいのでしょうか。

ウブントゥが教えてくれることは、「人間の成長は、完全

に他者との間で相互依存している」ということです。このことはモースの「贈与」の概念に似ています。これは、生きていくうえで相互の関係、相互の義務、互酬性を重視した考え方です。継続的にわかちあいを続けることで自分と他者との互酬的なバランスを維持しようとしています。富は、互酬の義務を果たすことで流通し、与えたり受け取ったりというサイクルが維持されることによって自分も他人もお互いが利用できるものになります。モースが書いてるように、「与えるのを拒むこと、招待し忘れることは、受け取るのを拒むことと同様に、戦いを宣するに等しいことである。それは、連盟関係と一体性を拒むことなの」です。

逆説的にみえますが、真の意味で裕福な人というのは、物質的には貧困が進んでいるプロセスに関わっている人、つまり、他者に物質的にもたらされうるもの、他者が本来もってしかるべきものをもたらすような活動に従事している人びとです。彼らが他人へ贈るモノは、たんに物質的なものだけではありません。そのとき贈られているのは、彼ら自身なのです。たくさん与えることは、与えた人を豊かにします。わかちあいを通じて、彼らはいろいろな関係を活性化し、また維持します。モースは、このことを「混ざりあい」と呼んでいます。「物に靈魂を混ぜ合わせ、靈魂に物を混ぜ合わせる」のです。その意味で「人生は、ともに混ざりあうもの」といってもよいでしょう。

場合に、個人的な富をもっていることを恥じ、他者の呪いの対象となったり、いばらの冠のようなものと考えられるようになるということもよくわかります。

贈与は究極的な犠牲である自分の命を先延ばしにし、贈与する者が生きることが可能になります。イサクを生きのびさせようと羊を供犠として捧げた聖書のアブラハムのようにです。個人的な贈与や、それが蓄積した歴史が多ければ多いほど、それは受けとる側にとっては、贈与する人の代用品とか身代わりとして受け入れられるようになってきます。

D・グレーバー<sup>註</sup>によれば、他のモノなら保有者のアイデンティティを付与することができず、貨幣にはそれはできません。貨幣は歴史の個性を蓄積するにはありきたりすぎなのです。逆説的に見えるかもしれませんが、貨幣は、その場で交換される即時的なもので、目に見えるように社会を刻印する力をもっていないのです。もっとパーソナルなモノのほうが時とともに歴史性を帯びる力があるわけです。お金はガソリンのようにあつという間に蒸発します。贈与物としては、お金は空腹を満足させないおやつのようなものです。究極的には、人間として生きていくということは、貸したり借りたりの繰り返しです。人生はすべて貸し借りのめぐりあわせであるということ、永遠に返すことができない借りがあるということ、これを認めることが大切です。同じ人間、自然環境、資源、あるいは先祖たちなどの超自然的な力などに、返

どんな宝物でも、贈り手自身、その魂、その精神を贈るものにはかえがたいものです。モノはたんに、それをもらう人がもつともほしがっていて、もらったらうれいはずの「モノ」に形を変えた、贈り手その人自身の代替物にすぎません。

この贈与、つまり与えるという考え方は、じつに多くの宗教のなかにもみることが出来ます。たとえばキリスト教では、聖書は、自己利益を忘れて与えること、謙虚が救いにつながることで、そして貧困は美德であることなどを説いて、無私無欲となって自己利益を放棄することを促します。

カトリックにおいて、修道院は秩序と禁欲主義を強調し、修道士とブラザー、シスターたちは「心貧しき人」であり、それゆえ「幸いである」とされます。「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」のです。厳しく自己を否定し、自らすすんで自分を律することは、プロテスタントでも同じように奨励されていることです。こうした自己実現は、誠実であろうとする宗教的献身に専心すること、生産的な労力を惜しまないことから来ています。

ある意味では、貧しく、富をあきらめるような状態でいようとするのは、個人が「幸福とか純潔とか知恵とか完全無欠とか不死とかのなんらかの状態」つまり、天国のような状態を確実に達成することを目指した自己放棄と自己啓発の技術として考えることができます。この観点から見ると、富裕層が貧しい人々や他の人々に富を循環させることができない

せない負債があるのです。

負債は、価値体系のエッセンスが具体的にあらわれたものであり、私たちが行うすべてのことの説明原理になっています。何かを成し遂げようとして他の誰かの力を借りている場合、次は自分が誰かを支えようという気持ちを持つのが普通でしょう。経済的な負債や物質的な負債ではなくても、返さなければならぬ、という感謝の気持ちをもつことがあるでしょう。個人は、個人的で自己利益的な成功だけを考えているわけではありません。これは、課税を免除する理由としてもいわれてきたことです。れっきとした資本主義のなかでも、多くの億万長者が財団を興し、慈善事業に従事するのは、こういうことでもあります。本当に裕福な人というのは、汗をかいたり大変な労働の代価として得た、めだつものを持っていないかたまりしますが、それは決して彼や彼女が怠惰であったり、失敗したり、あるいは突如貨幣価値が下がってその犠牲になって何も残らなかつた、というようなことではなく、積極的であれ消極的にであれ、人々のために彼らの所有するモノとしての富を捧げた人だということなのです。

#### オポチュニズムの陥穽

アップントウイズムは、他人の人間性を損なうようなことをする人は、たとえ一時的に完全だと思われたとしても、実は完全ではないのだということ、私たちに教えています。人間

がそれ自体では不完全だという認識をもたらずのです。

では、このウブントウイズムの考え方がみんなに成功をもたらし、社会的に異質なものを包みこむことができるのはいつでしょうか。それともそれは、「今から述べるような」単なる個人のオポチュニズムの罫にとらわれてしまうのでしょうか。遠く離れた土地で頑張っている人は、家族、友人、知人によるさまざまな要求をされ、その犠牲になる可能性があります。その家族や友人は、何かをしてあげてその見返りを求めても返すことができないことがほとんどでしょう。関係にもどづいて何かを求められたときに、どこまで真剣に考えるべきであり、どこからであれば無視してもいいのでしょうか。

資本主義経済とグローバリゼーションの進展のせいで、アフリカでも、出身の村や故郷の町、都市、さらには故郷の国さえ後にして、もっと緑の牧草地はないかと競うように出ていくことも一般的になっていきます。彼らの村、町、都市や国に残された家族や友人は、当然のことながら、移住した親族や友人が成功した暁には、その成果をわかちあう仲間に入れてもらおうと手を尽くします。私がここで考えてみたいのは、アフリカの移民と残された家族や友人との間の緊張関係なのです。ウブントウ精神を訴えながらその実それを否定することになるような、オポチュニズムの物語はいつも失望させられるものですが、ここには、連帯とか、相互扶助、そしてみんなのための責任といったものの、悪い見本を見ることがで

ラプでプレーしたトーゴの有名な国際的サッカー選手です。

二〇一五年五月六日、私は彼のFacebookの投稿を読みました。彼がいろいろ尽くしても、トーゴの家族は、感謝のかけらも示さなかったのです。彼はその話を、お金でできることなどにもない、という教訓談として、かつ「すべての家族が私の家族から学ぶことができる」という希望の話として、告白したのです。

アデバヨールは、一七歳の時に、サッカー選手としての最初の年俵で家族のために家を建てました。二〇〇八年にアフリカ年間最優秀選手賞のトロフィーを授与されたときには、感謝の意味をこめて、母親を連れて授賞式に行きました。母親をロンドンに連れていき、健康診断と治療を受けさせたりもしました。しかし、娘が生まれて、報告の電話をしたときは、すぐに切られてしまいます。

それでも、彼は母親をサポートし続けました。ナイジェリアの預言者T・B・ジョシユアと会うためにラゴスへ渡航する旅費を出しました。「多額の起業資金」を与え、売る商品には、宣伝のために名前と写真を載せることを認めました。それでもまったく感謝されないことを知って、彼は自問します。「これ以上、他に何ができるのだろうか?」

多くのことをしたのに、母親に認識の変化と感謝の気持ちはいまもありません。彼は一二〇万ドル払って、部屋が一五もある家をガーナに購入し、そこに姉のヤボと従兄弟

きます。ここでは移民は、残してきた家族や友人と富をわかちあうべきであることはわかっていますが、それをかちとることができないのです。この大陸全体でみられる、さまざまな故郷の村のニーズと問題を対象とした、特定の村出身の子女や、都市や海外にエスニシティや出身地域にもとづいて組織される発展のためのアソシエーションの研究を見ると、その実例がよくわかります。

ここでは、なんとといっても仕送り送金が家族を支えてきたといえます。しかし、移民が両親その他の関係を本国や村に再分配するためにかなり骨を折ったとしても、彼らの努力がいつも評価されるとは限りません。一部で有名な「超特急オナリン」(Honoring Express)という、アメリカ在住のカメラマン人女性のYouTube映像は、「呵責なき、恩知らずの家族」(Demanding and ungrateful family members)という題名どおり、家族からの容赦ない要求の難しさをよく捉えています。

二〇一八年二月、私も参加したオランダ王立科学アカデミーのパネルディスカッションのテーマは、「サッカーの商品化と、ヨーロッパのクラブと代理人によるアフリカ人選手の搾取」でした。しかし、実際にヨーロッパでプレーしているアフリカ人サッカー選手に言わせれば、家族や友人による搾取のほうがもっとひどいことになるかもしれません。

エマニユエル・アデバヨール(一九八四)はモナコ、アーセナル、マンチェスター・シティなど、ヨーロッパのトップク

のダニエルを住まわせていました。数カ月後に休暇で家に行った彼は、たくさん車を見て驚きます。姉は、無断で他人に家を借していたのです。ダニエルは家から追い出されてきました。「電話をして説明を求めると、約三〇分間にわたって私を侮辱し続けたのです」。「私は状況を説明するため母にも電話をしました。母も姉と同じように、三〇分間、私をのしり続けたのです。尽くしてきた人々から感謝ではなく非難されるとは、予想もしていませんでした」。

アデバヨールは、二五年間ドイツに住んでいた兄弟、コラにも失望させられます。子供の教育費をすべて支払い、コラが帰省するときには旅費を負担しました。モナコにいたとき、起業資金を提供したこともありましたが、すぐに投げ出してしまっていました。最も困ったのは仲間意識とおもいやりがないうことでした。二〇一三年七月二二日に「亡くなった弟ピーターを埋葬するときにも、コラには多額の資金を飛行機代にと送りましたが、埋葬式には姿をあらわしませんでした」。しかもあちこちでピーターを殺したのはアデバヨールだと言いつらしたのです。

ピーターを救うために何もしなかったと非難され、アデバヨールは愕然としました。病の知らせを受けて、ガーナから車を飛ばしてトーゴへ戻りましたが、母親に「あなたはお金を稼いで送ってくればよいから、私たちがすべてやっておくから」と言われ、会わせてももらえず、やむなく引き返し

たのでした。葬儀に出席さえしなかったのに、コラはピーターの死をアデバヨールのせいだという一方で、アデバヨールが成し遂げたことすべてを、兄弟の代表である自分がしたかのように言います。そればかりか、コラは家族についての正確な話を『サン』紙に売り、アデバヨールがクラブを首になりにかねないような中傷の手紙を送ったのです。

二〇〇五年四月二二日、アデバヨールの父親が亡くなります。彼は家族全員の航空券を準備しました。「父には、亡くなるずっと前に病院で、葬儀を悲しみの瞬間でないようにしてほしい、と頼まれていました。父は私たちに、父の人生を思い出しても祝福してほしかった。私が執り行った葬儀が父の望み通りであったかどうかはわかりません。神のみぞ知ることです。でもコラは、何にもしなかったくせに、私が家族を顧みないと言っています」。

アデバヨールは、コラの数多くの酷い行いを許してきました。のどもとにナイフを突きつけられて自動車販売の事業を始める資金を要求されたときさえ、許してきたのです。そのたびごとにアデバヨールは「血は水より濃い」ことを思い知るのでした。

彼が学費を払ってフランスのフットボールアカデミーに入られてやった別の兄弟ロティミは、仲間の選手の携帯電話を盗む事件を起こしました。数カ月のうちに二七人の選手から、計二台の携帯電話を盗み、また、有名な選手のジャージを

財産のすべてをもう分けあっているのです」。

家族の態度や行動から見ると、アデバヨールには、自身の財産の所有権はもちろん、意思も存在しないかのようです。確かにウブントウの主張では、自分の運命や富はその人個人ひとりに属するものではなく、自分の成功は他の人とわかちあう義務がある——親密であろうと縁遠かろうとも——と考えるのが普通なのですが、彼の家族は彼が苦勞して稼いだ富の所有権すら認めず、そんなことを考えたこともないようです。アデバヨールの家族は、彼の富の大部分をわかちあっているにもかかわらず、もともととわけ前をくれることが当然だと思っっています。まさに何もなくなるまでくれるはずだと。アデバヨールは、手元に何もなくなつて初めて彼らに赦され、忘れてもらえるのです。富を奪い取られ、心、体、そして魂さえも奪い取られ、死んだような存在となったときにはじめて自由にしてもらえるのです。

アデバヨールは、感謝されなかったとしても家族のためにしたことを誇りに思っています。時には、自殺したいほどの気もちになったこともあるそうです。「私を知っている人なら誰でも、私が自分の国と私の仲間のために何でもすることをご存知でしょう」と彼は話を締めくくりました。

アントワネット・ミュラー (Antoinette Muller) の「見知らぬ土地の見知らぬ人」と題する記事を読めば「家族のために稼ぎ、今ではアフリカじゅうでたくさんの慈善プロジェクトを

盗んだともいいます。アデバヨールのおかげで優遇措置を受けながら、彼は盗みをやめず、気持ちにじり続けました。自分が手にしたチャンスもいかせなかったのです。

それでもアデバヨールは、ある時母親に頼まれて、ロティミとその友人のドバイまでの航空券を用意します。ビザの関係で、当日出発の便に乗らねばならず、ようやく手に入ったのはファースト・クラスのチケットでした。キャリアのためにはいい機会だと思つて送り出したのもつかの間、わずか四日後にロティミは帰ってきてしまいます。ロティミの言い分によれば「ライフスタイルが合わない」のだそうです。「厳格なイスラム教徒が多いので、自分がやりたいことができないというのです。酒も飲めないし、パーティーを開いたり、公の場では女の子にキスすることもできないことがお気に召さないとのことでした」。

二〇〇五年に家族会議を開いたとき、家族は全員、アデバヨールが全員にそれぞれ家を建てるべきだし、毎月の俸給を支払うべきだと言ったそうです。彼以外の家族にとつては、アデバヨールは財布のようなものです。彼らは、アデバヨールの財産を分けあうことになんのためらいもないし、援助の範囲を広げようとする彼のどんな提案にも厳しく敵対的です。「私が困っている人を助けようとするときはいつでも、全員がそれに反対しました」。そしてこう結論づけます。「私はまだ生きているのに、まるで死後の相続のように、彼らは私の

支援している」アデバヨールが「深く思いやりのある、信頼できる人である」ことがわかります(『デイリー・マーヴェリック』(Daily Maverick) 二〇一五年五月二二日)。彼はほんとうは、家族の範囲を超えて蓄積したものをアフリカの慈善事業を通じてわかちあいたいと思っっています。家族は、それを極力やめさせようとしていました。彼らは彼のウブントウ精神のたまものを最初から最後までしゃぶりつくそうとするのです。

この話は完全にアデバヨールの視点、つまり狩る側ではなく狩られる側の視点から語られていますから、彼ほどの人がなぜ家族の略奪のなすがままだになっているのか、疑問に思う人もいるかもしれません。苦勞して稼いだものは自分のものだと、個人の権利を主張することはできたはずですが、彼がこの一歩を踏み出さなかったのはなぜでしょうか。「血は水より濃い」ということで十分な説明になるでしょうか。

過剰ともいえる家族の要求にこたえ、その面倒をみようとしていたアデバヨールは、異質なものをとりこもうとする包摂の精神、思いやりをもつこと、そして寛大さと慈悲について、最初に紹介したネルソン・マンデラがウブントウ精神にのっとって行ったこととかわりはないのです。

#### ウブントウの未来を反省的に考える

ウブントウイズムは、アフリカ全土でできまりがあるわけでもないし、同じようなかたちで行われているでもありません。

ん。ウブントウイズムは、創造的な構想と実践に基づく行動を意識的に起こし続けることで、回復し、復活させ、そして再発見しなければなりません。とくに、植民地主義、アパルトヘイト、そして新自由主義的な個人主義を経験した南アフリカのような国々では、歴史によって損なわれたアフリカ旧来の価値体系と人格の哲学を、西洋近代と持続的に対話させるために、こうしたウブントウイズムが必要で、このことによって、西欧近代を批判し、それを補うものとして、ウブントウイズムがもつ解放の可能性が動き出すのです。ウブントウイズムの回復は急務です。経済の急激な衰えと、脱アパルトヘイト後の憲法の下で、人々の日々の生活や権利がおびやかされている現状を考えると、ますます急がなければなりません。アパルトヘイトから多くの苦い教訓を得たはずのこの憲法には、本来中心となるべきウブントウに、ふさわしい位置が与えられていません。

緑の牧草地を追い求めてコミュニティから出て行った「アデバヨールのような」アフリカ人と、残された人々はどうやって共通の未来を築けばよいのでしょうか。この大陸では、不平等な出会いと、決してお返しができることがないのに現地の側が寛大さを示した歴史があります。そのせいで、ヨーロッパ人と西洋が、この大陸を体系的に処分する権利があるかのように考えられています。その処分についても、力を貸さなければならぬというのでしょうか。

るうえで重要な役割を果たしています。歴史も、支配の技術として重要な役割を果たしています。

アデバヨールの苦い経験は、たとえ送金によって、送金者が想定していた結果がみられない場合でも、海外移住者による送金が「アフリカ諸国の所得格差に大きなプラスの影響を与える」ということを部分的に説明しています。よく言われてきたことですが、送金もアフリカの経済成長に大きく貢献しているわけです。国内制度が十分に機能している国の場合、送金によって、経済成長が加速化する可能性があるという研究もあります。

「ブラック・タックス<sup>注1</sup>」という言葉でわかるように、送金は、国家によってではなくて、移民の成功の分け前にあずかる権利があると考えられる家族や友人によって直接課される税金のようなものです。

人は、いろいろな文化のなかを行き来し、いくつもの大陸をまたにかけて、市場社会と贈与経済の大海を航海しています。その航海のなかで、自分たちのつながりと人間性を表現しようとしているのです。しかし、オポチュニズムの急増によって、ウブントウ精神が損なわれています。市場経済と贈与経済の相互関係と相互依存、義務と互酬性、自律性と社会性などを再発見し、再発明し、再びそだてあげなければなりません。別の言い方をすれば、オポチュニズムの暴走を契機として、かつては自分も狩られる側になりうるし逆もそうで

贈与と市場経済との間の相互関係は、アフリカの移民の生活と、移民たちが維持しようとしている出身国との関係のなかに、具体的にみることでできます。ディアスポラのアフリカ人は毎年大陸にかなりの金額を送金しています。故郷に残した家族や友人のオポチュニズム、そしてウエスタン・ユニオンやマネー・グラムのような会社に、食べ物にされています。そうした会社は、競争もなく市場を独占し、送金のために法外な額の請求をしても規制されることもないので、大変な成長を遂げています。ポール・コリアーは、送金は、移民が受入国から出身国へ気づかないまま行っている開発援助事業だ、と言っているほどです<sup>注2</sup>。

アフリカの移民の多くは、どのように、そして誰に送金するかについて、非常な注意を払っています。それは、投資し、育てていくやり方でもあるからです。アデバヨールの例でお話ししたように彼らの多くは、一種のオポチュニズムの犠牲になってきました。海外のアフリカ人は、一般に、家族や友人の策略を見抜くのがうまくなっています。

しかしそれでも、残された家族関係や友人関係を理由に現れるオポチュニズムを、特定個人のわがままとか非倫理的行動として責め立てることは実りがありません。世界規模での不平等が拡大していますし、市場経済に、他のどんな経済にもない特権的な位置を与えようとする構造があります。こうした構造的要因が、機会とオポチュニズムの関係を決定す

あるという狩りの本質に立ち返り、狩るものと狩られる者とを、ふたたび結びつけなければいけないのです。

人間性、人権および民主主義は、市場のグローバルな統合から生じる経済および不平等と切り離して考えることができません。このことが多くの大切なものを取りこぼしてきました。二一世紀は、どこまでも矛盾を抱えた時代です。暮らしている人にもいえる。貧困のなかで暮らす人がいる一方で驚異的な食料が捨てられています。世界の資源が乱獲されるなかで、ごく少数の人や一族の手に資源は集中してしまっています。

ウブントウイズムは、現代世界のなかでも勝利するでしょうし、そうしなければなりません。現代世界には、誰でも最低限暮らしていくのに十分な量の資源と富が出回っているのです。問題は、公平性と再配分です。私たちは世界の資源をうまく使っています。それらを無意味にため込んだり破壊したりしています。実際、ばかげたことが起こっているのです。経済学者は、アフリカは「貧しい」と言います。それは物質的にも他の意味でも間違っています。アフリカは社会的、文化的、概念的、象徴的、その他さまざま豊かな資本を持っています。市場化し収益を合理化し、なんでも商品にしてしまったりかたは、社会生活にとって唯一のかたちでもなければ、あるいは最も重要な価値体系であるはずもありません。我々が「貧しい」ようにみえるのであればそれは、私たちが

コンヴィヴィアリティを何より大切にし、インコンプリートネス(不完全性)を認容するような社会システムと社会の構造をもっているからです。

社会性というものを、経済的な富やお金で買えるもの、そして商品化されたものの価値だけに焦点化して考えるのは、間違っています。それは経済学で何でも説明できるかのような万能感や錯覚にもつながっていますが、そこでの経済学というのは市場経済をあつかう、いろいろありうるはずの経済学のひとつにすぎません。豊かさを物質的な豊かさのみに求め、狭い意味での経済にのみこだわって資本をとらえ、合理的選択にだけ拘泥することは、アフリカのものであれ、それ以外の地域のものであれ、異質なものを包み込もうとするような包摂の哲学や実践の前では陳腐なものに映ります。モノの形が無限に変化する可能性をもつ認識論・宇宙論のなかでは、人間のなかにもモノは見出せまらずし、モノのなかに見出すことができる人間性もあるのです。

私が今日ここでお話ししたのは、グローバリゼーションの文脈と、不平等な出会いの歴史についてでした。それは、グローバル資本主義のもとでアフリカその他の地域との関係を形づくってきたのです。アフリカ人と、そのアイデンティティ、そしてアフリカ人の移住というものは、ウブントゥ精神のもとに、変化し続ける世界のなかで本当の人間になろうとする経験の不可欠な一部である、ということ論じてきまし

# 西サハラ アフリカ最後の植民地と人びと



## 岩崎有

いわさき・ゆういち ジャーナリスト。アジアプレス所属。武蔵大学社会学部非常勤講師。アフリカ二十カ国取材。アフリカの人びとの日常と声を社会・政治的背景とともに伝える。アジアプレス・ネットワークで「西サハラを歩く」を連載中。

上— 占領地最大の都市エルアイウンの市街地。  
下— 難民となることを選んだRASD外務省のモハマド。難民キャンプで娘のミナが生まれた。(2枚とも筆者撮影)



た。ウブントゥ精神をもったアフリカ人の活躍は、今日の現代世界でもこれまで以上に必要とされているのです。

注1 Tumu, D. (1999), *No Future Without Forgiveness*. Random House.

注2 マルセル・モース『贈与論 他二篇』(森山工訳、岩波書店、二〇一四年)、一〇三、一三六、四三三頁。

注3 フーコー『自己のテクノロジー—フーコー・セミナーの記録』田村俊、雲和子訳(岩波書店、二〇〇四年)、二〇頁。

注4 Grader, D. (2001), *Towards an Anthropological Theory of Value: The False Coin of Our Own Dreams*. Palgrave. デヴィッド・グレーバー『負債論—貨幣と暴力の五〇〇〇年』酒井隆史、高祖若三郎、佐々木夏子訳(以文社、二〇一六年)も参照。

注5 Collier, P. (2013), *Exodus: Immigration and Multiculturalism in the 21st Century*. Penguin Books. ホール・コリアー『民主主義がアフリカ経済を殺す』甘糟智子訳(日経BP社、二〇一〇年)も参照。

訳注1 機会主義、便宜主義などと訳される。機会と見るや周囲や他者を顧みず、ただちに行動に移してものにしようとする立場。

訳注2 たとは「日本人会」をイメージされるとわかりやすい。

訳注3 「ブラック・タックス」は、アメリカで黒人に課される経費のことを指してきたが、近年は安定した職に就いた黒人たちが、祖国の家族などに義務的に送金することを指してこう呼ぶ。

訳注4 コンヴィヴィアリティ(共生力、饗宴、Conviviality)、インコンプリートネス(不完全性、Incompleteness)は、著者の思想の鍵概念である。不完全なものが不完全なものとの出会い、自らがつつ、よいものを持ちよって、対話し、ともに利益を分かち合う饗宴にも似たコンヴィヴィアリティを実現することが、ニヤムンジヨが描く理想の将来像である。

実は、今もアフリカには植民地が残されている。世界地図を広げると、アフリカ北西部の西サハラだけが塗られていない。

国連では西サハラを「非自治地域」として挙げ、独立が待たれる地域としている。しかし、スペイン領サハラだった西サハラに、モロッコは入植者と軍を送り続け、「モロッコ南部」としての既成事実を積み重ねてきた。

西サハラは、モロッコが建設した「砂の壁」と呼ばれる分離壁で二手に隔てられている。壁の海側はモロッコ占領地とされ、内陸側は、西サハラの民サハラウィが建国したサハラ・アラブ民主共和国(RASD)が統治する解放区と呼ばれる。RASD住民の大半は、アルジェリア領内のチンドウーフにある難民キャンプに暮らしている。

アフリカ最後の植民地である西サハラは今、どうなっているのか。二〇一八年から二〇一九年にかけて、占領地と解放区、難民キャンプを訪ねた。